

Ⅲ. 社会への回帰

学びの森の住人たち (14)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



チーム絆 地域チーム

「チーム絆」は、京都府府民生活部青少年課が主催する、初期型ひきこもりの支援事業です。¹その立ち上げは、2008年。そして翌年には、府内6ヶ所に民間からなる地域チームが誕生し、府内に引きこもり支援のセーフティネットが張り巡らされることになったのです。アウラの森は、その地域チームの1団体として、2009年よりこのチーム絆にかかわるようになっていきました。

地元地域からの不登校の子どもの在籍がなくなったことを契機に、主催していた不登校支援連携推進会議は自然消滅することになりました。そんな矢先に今度は、府民生活部の青少年課がアウラの森を訪ねてこられました。もともと青少年課は、ひきこもりの若者支援を手掛けており、その中間就労プログラムの一環として「職親制度」という職場体験のシステムを持っていました。そしてその訪問の目的は、この職親制度にのっとり、ある青年の就労体験を引き

受けてほしいというものでした。私たちは快くそれを引き受け、一定期間その青年に体験に来てもらい、無事その体験を終えることができました。そしてその後、青少年課の担当者と不登校とひきこもりとの関連性や一旦不登校やひきこもりになっても、そこから再出発ができるような社会システムの構築について、何回か議論を重ねるようになっていきました。

私は、担当者にニューヨークで70年代に実施された街の社会資源を十分に活用することで、街そのものを学校にしていこうとする *City as School*²というプロジェクトを担当者に紹介したところ、それが一つのヒントとなって、前年から継続していた初期型ひきこもりの支援事業「チーム絆」の中に、「地域チーム」が誕生することになっていったのです。そして、このことによって府内にある官民の垣根を越えたさまざま社会資源をネットワークで結ぶことが可能となり、チームでひきこもり状態にある若者たちと社会との接点を模索しながら、その再出発を応援しようという新たな枠組み

¹ 平成20年度京都創発事業認定一覧
<http://www.pref.kyoto.jp/sohatsu/1255934311141.html>

² 梶山正弘 1975 『アメリカ教育の現実』 福村出版

が生まれることになったのです。

青少年課は、若者支援という観点から福祉や労働といった領域との関連が多い部署でした。私たちはこれまで府教委としかつながって来なかったのが主な連携先としては、学校や市町村の教育委員会に限られていました。しかし、この青少年課とのかかわりが一つのきっかけとなって、これまで未知の領域だった福祉や労働の世界へとそのつながりを広げるようになっていったのです。

現在のアウラの森の連携先としては、小中高校、大学、市町村教育委員会、府教育委員会、京都市教育委員会、京都府青少年課、文部科学省、家庭支援総合センター、発達障害者支援センター、総合教育センター、就労支援センター、ジョブパーク、保健所、医療機関、各 NPO 団体など、そのつながりがどんどん広がりつつあります。そしてこのネットワークが拡大すればするほど、私たちは不登校の子どもたちをより複眼的な広い視点で捉えられるようになっていったのです。

不登校という社会現象を教育というフレームの中だけで捉えることは、極めて難しいように思います。冒頭にも述べたように、それは、不登校という現象に現代社会の持つ多様性がプリントされているという背景があり、今の学校が抱える画一的なシステムでこの多様性を補完することが難しいからです。つまり不登校という現象を、この多様性と画一性の葛藤と捉えるならば、それをこの葛藤そのものが生じている座標面

の中で解決することは、論理的に不可能だということになるのです。その解決には、よりメタな次元の視点が必要となるように思うのです。

「チーム絆」への参加は、私たちにより広く、より多様な視点を提供してくれることにつながりました。そしてこの視点の拡張は、同時に私たちの活動そのものを省察的に振り返る機会を提供するものでもありました。日々子どもたちに関わりながらも、その関わりそのものを振り返る。そういった私たちの基本的な姿勢が、チーム絆への参加を通してより明確になっていったのです。

